

教職志望の大学生が重視する児童の特徴 —大学生の性格特性と児童の性格特性の重視度との関連—

石田 靖彦

学校教育講座 (心理学)

College Students' Personarity and their Perception of Personality of Elementary School Children

Yasuhiko ISHIDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

問題と目的

教師が児童にどのような特徴を望み、期待するかという教師の児童に対する期待は、教師の指導行動に影響を与え、ひいては児童の学習意欲や学業成績、適応感にも影響を及ぼす。このような現象は「教師期待効果」と呼ばれ、古くから数多く研究されてきた(Brophy & Bood, 1974 浜名・蘭・天根訳, 1985; 浜名・蘭・古城, 1988; 古城・天根・相川, 1982)。ただし、教師期待効果は、ある特定の児童に対する教師の期待がその児童の行動や適応感などに影響することを示したもので、それぞれの教師が児童全体に対して、何を期待しどのような行動や特徴をもつことを重視するかという、教師が児童に求める要請の個人差について検討しているわけではない。

他方、教師の児童理解が教師の指導行動や児童の行動に及ぼす要因については、教師の認知次元の多様性という観点からも検討されてきた(近藤, 1984, 1994; 天根・吉田, 1983)。

笠松・越 (2007) は、教師用 RCRT (近藤, 1984) を用いて教師の認知次元の多様性と、児童の教師に対する多様性認知の把握や級友関係、学校・学級適応感との関連について検討した。そして認知次元の多様性が高い教師の児童ほど、教師が児童を多面的に把握していると認知し、級友関係も良好で、学校・学級適応感も高いことを明らかにした。多くの認知次元をもつ教師は、ある認知次元で評価の低い児童であっても他の認知次元では高く評価される可能性があり、それが児童同士の多面的な理解を促進し、級友との関係を良好にして学校・学級適応感を高めると考えられる。このように、教師が多面的な認知次元をもつことは、児童同士の関係や適応感を高める可能性がある。

しかしながら、教師用 RCRT は児童をどのような認

知次元を用いて弁別しているかという認知次元の内容や認知次元の多様性を測定するもので、児童に対してどのような特徴を期待し、重視しているかを直接測定しているわけではない。それは、教師用 RCRT での「理想の子ども像」や「ウマが合う児童」が各認知次元上で高い値を示すわけではないことから明らかである。

近藤・沢崎・斉藤・高田 (1988) は、教師用 RCRT で測定された各認知次元上での「理想の子ども像」との各児童とのズレの小ささを「教師内地位指数」として数値化し、それが児童のスクールモラルと関連することを明らかにした。また飯田 (2002) の研究でも教師地位指数と児童のスクールモラルは、 $r = .54$ ($p < .01$) という比較的高い正の相関が示されている。

これらの結果は、教師の認知次元が多面的であることよりも、むしろ「理想の子ども像」とそれぞれの児童がどの程度一致しているかどうかが、教師の指導行動を通じて児童の行動や適応感に影響を及ぼすことを示唆している。

ところで、教師用 RCRT を用いて「理想の子ども像」を明らかにする方法は、教師の認知次元の内容やその多様性を明らかにできるとともに、その認知次元上での「理想の子ども像」を位置づけたり、それと各児童とのズレを数値化できるという点で多くの有用な情報を有している。しかしながら、その手続きには多くの時間が必要であり、また学級担任など実際に学級集団の児童を知らない人には実施することはできないという問題点もある。

教師が児童に期待し重視する行動や特徴には様々あるが、それらはある程度共通しているものの、どのような行動や特徴を重視するかという相対的な重視度には個人差があると考えられる。

本研究では、児童の性格特性を表すさまざまな行動

を提示し、それぞれの行動をどの程度重視するのかという相対的な重視度を直接評定してもらうという手法を用いる。先述したように、児童に期待する性格特性は、教師によって異なると考えられるが、本研究ではその前段階として、教職を志望する大学生を対象にして、彼らが児童に対してどのような性格特性を期待し、重視しているのかを明らかにする。

本研究の第二の目的は、児童に期待する性格特性の重要度の個人差と、大学生自身の性格特性との関連について探索的に検討することである。教職を志望する大学生が、児童のどのような性格特性を重視しているのか、またそれにはどの程度の個人差が存在し、その個人差と大学生自身の性格特性がどの程度関連しているのかを明らかにすることは、今後、教職についている教師と比較する上で基礎的資料になると考えられる。本研究ではその点についても検討する。

方 法

調査対象者

愛知教育大学で筆者の担当する教職科目を受講した大学生3、4年生に対し、授業の一環として実施した。授業は、2015年度前期と2017年度前期の2回にわたり同じ授業内容を別の受講生に対して行った。

本研究の分析対象者は、後述するように授業終了後に調査用紙を提出してくれた211名（男性45名、女性61名、不明105名）である。性別に不明が多いのは、2015年度の調査では、性別を尋ねていなかったためである。なお、2015年度を受講生は202名で提出者は111名(55.0%)、2017年度を受講生は172名で提出者は100名(58.1%)であった。

手続き

調査は「教師の児童生徒理解」に関する授業（90分）の一部として授業中に実施した。授業の一貫として実施したため、全員に回答を求めたが、その調査用紙を提出するかどうかは学生の判断に任せた。調査用紙の提出に際しては、調査用紙は匿名で個人が特定されることはないこと、提出は任意で成績に関係がないこと、研究以外には使用しないことを周知した上で、授業終了後に同意した学生のみに提出してもらった。

なお、本研究では省略するが、授業では調査結果を周囲の友人と比較して児童に重視する性格特性に違いがあるかどうか、また児童に重視する性格特性と自身の性格特性に関連があるかどうかを周囲の友人と比較しながら議論させた。そしてその感想を自由に記述してもらった。

調査内容

1. 児童に期待する性格特性の重視度

村上・畑山（2010）で作成された小学生用5因子性格特性と問題攻撃性の中から、それぞれ4項目計24項目を抽出し、すべての項目についてその特徴をもつことが望ましいように表現を修正して使用した。例えば、問題攻撃性の「すぐにおこるほうです」は「すぐにおこらない」に修正して非攻撃性とした。具体的な項目はTable 1に示す。

24の性格特性の項目をランダムに配置し、「小学校4年生から6年生の児童」を想定させた上で、その児童に持ってほしい特性として重視する程度を、試行錯誤しながら順位付けをしてもらった。そして最終的に上位1-5番の性格特性に「◎」、上位6から10番の性格特性に「○」、上位11から15番の性格特性に「△」を付けてもらった。各性格特性の重要度の得点化は、「◎」を3点、「○」を2点、「△」を1点、その他を0点とした。

2. 調査対象者自身の性格特性

児童に期待する性格特性と同じ24項目を使用し、各項目が自分自身にあてはまる程度を「5. よくあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」の5件法で回答を求めた。調査対象者の性格特性の得点化は、6つの性格特性それぞれについて、その性格特性を表す4項目を単純合計し各性格特性得点とした。

各性格特性について α 係数を算出したところ、「協調性」で $\alpha = .78$ 、「良識性」で $\alpha = .81$ 、「非攻撃性」で $\alpha = .79$ 、「外向性」で $\alpha = .58$ 、「知的的好奇心」で $\alpha = .85$ 、「情緒安定性」で $\alpha = .85$ であった。外向性の内的整合性がやや低い、児童に重視する性格特性と対応させるためにそのまま使用することにした。

結 果

1. 児童の性格特性の重視度

Table 1は、各項目の重要度の平均値を算出し降順に示したもので、Table 2は各4項目から構成される5因子性格特性と非攻撃性をくわえた6つの性格特性の重視度の平均値を算出し降順に示したものである。

項目別に見ると、「協調性」や「良識性」が上位を占めており、次いで「外向性」「非攻撃性」で「知的的好奇心」や「情緒安定性」の重視度は低かった。

4項目を合計して6つの性格特性の重視度について6つの特性を参加者内要因とする1要因分散分析を行ったところ、有意な要因の効果が示された($F(4.32, 906.25) = 247.49, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .54$)。Bonferroni法による多重比較を行ったところ、「非攻撃性」と「外向性」の間と、「知的的好奇心」と「情緒安定性」の間以外のすべての特性間に有意差が示された($MSe = 6.79, \text{すべて} p < .001$)。つまり、性格特性の重視度は、協調性 > 良識性 > 非攻撃性 = 外向性 > 知的的好奇心 = 情緒安

Table 1 各項目の重視度の平均値と標準偏差（降順）

性格特性	項目内容	M	SD
協調性	思いやりがある	2.58	(0.79)
良識性	最後まで全力をつくす	2.27	(0.86)
協調性	人に対して優しい	2.24	(0.87)
協調性	だれにでも親切にする	2.22	(0.95)
協調性	いつも人の立場になって考える	2.10	(0.97)
良識性	やろうと思ったことを根気強くやる	2.09	(0.85)
外向性	元気がよい	2.07	(1.06)
非攻撃性	人にらんぼうなことをしない	1.90	(0.99)
外向性	活発に行動する	1.87	(1.07)
良識性	取り組んだことを途中でやめない	1.63	(0.96)
知的好奇心	問題をいろいろな方面から考える	1.30	(1.11)
非攻撃性	すぐに怒らない	1.15	(0.95)
非攻撃性	ちょっとしたことで腹を立てない	0.96	(0.88)
非攻撃性	嫌なことを言った相手に必要以上に強く言い返さない	0.93	(0.90)
外向性	話し好き	0.64	(0.91)
情緒安定性	くよくよと考えこまない	0.62	(0.80)
良識性	あきっぱくしない	0.60	(0.82)
情緒安定性	小さなことを気にしない	0.57	(0.80)
情緒安定性	いろいろなことを気にせず落ち着いている	0.56	(0.79)
情緒安定性	あまり心配ばかりしない	0.44	(0.73)
知的好奇心	いろいろな問題や事柄から同じ性質を見つけ出す	0.41	(0.73)
知的好奇心	いろいろなことをたくさん知っている	0.40	(0.74)
知的好奇心	たくさんの物事を知っている	0.31	(0.65)
外向性	おとなしくない	0.16	(0.52)

Table 2 各性格特性の重視度の平均値と標準偏差（降順）

	M	SD
協調性	9.15	(2.36)
良識性	6.58	(2.08)
非攻撃性	4.94	(2.27)
外向性	4.73	(2.35)
知的好奇心	2.42	(2.14)
情緒安定性	2.18	(2.04)

定性であった。このことから、少なくとも教員養成大学の大学生は、児童の協調性や良識性を重視し、知的好奇心や情緒安定性は相対的に重視していないことが明らかとなった。

2. 児童の性格特性の重視度と調査対象者の性格特性との関連

児童に重視する性格特性と調査対象者の性格特性との関連について検討した。各性格特性間の相関係数を Table 3 に示す。

Table 3 児童の性格特性の重視度と調査対象者の性格特性との相関

	調査対象者（大学生）の性格特性					
	協調性	良識性	非攻撃性	外向性	知的好奇心	情緒安定性
児童の性格特性の重視度						
協調性重視度	.11	-.05	.08	.12 [†]	-.23**	-.20*
良識性重視度	-.02	.18**	-.04	.05	-.01	.02
非攻撃性重視度	-.02	-.13 [†]	.04	-.21*	-.03	-.08
外向性重視度	.03	.18*	-.04	.23**	.08	.04
知的好奇心重視度	-.10	-.13 [†]	-.08	-.08	.08	.14 [†]
情緒安定性重視度	-.03	-.06	.04	-.14*	.13 [†]	.10

注) N=207; **p<.01. *p<.05 †p<.10

結果として相関はあまり高くなく、絶対値が.20以上の相関は、児童の協調性重視度と調査対象者の知的的好奇心($r = -.23, p < .01$)、情緒安定性($r = -.20, p < .01$)にそれぞれ低い負の相関、児童の非攻撃性重視度と調査対象者の外向性($r = -.21, p < .05$)に低い負の相関、児童の外向性重視度と調査対象者の外向性($r = .23, p < .01$)に低い正の相関が示された。

このことから、児童の協調性を重視する人は知的的好奇心が低く、情緒安定性が低い傾向にあること、児童の非外向性を重視する人は外向性が低く、児童の外向性を重視する人は外向性が高い傾向にあると言える。ただし、いずれの相関も低く児童に重視する性格特性と調査対象者の性格特性との関連は小さいと考えられる。

3. 児童に重視する性格特性の違いによる調査対象者の分類と調査対象者の性格特性の比較

前述した通り、調査対象者全体を対象とした分析では、協調性や良識性の重視度は高く、知的的好奇心や情緒安定性の重視度は相対的に低いことが示された。しかしながら、どのような性格特性を相対的に重視するかは調査対象者によって違いがあると考えられる。そこで児童に重視する性格特性の相対的な違いから、調査対象者を分類して、調査対象者の性格特性を比較することにした。

児童に期待する6つの性格特性の重視度を標準得点化した上で、ユークリッド平方距離を用いたward法による階層クラスタ分析を行った。デンドログラムを

参考にして調査対象者を分類したところ、5つのクラスタが抽出された。各クラスタにおける児童の性格特性の重視度の平均値をFigure 1に示す。

各性格特性の重視度について、5つのクラスタを要因とする一元配置分散分析を行ったところ、いずれの性格特性の重視度でもクラスタの効果が有意となった(協調性重視度: $F(4, 206) = 23.45, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .31, MSe = .701$; 良識性重視度 $F(4, 206) = 51.07, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .50, MSe = .512$; 非攻撃性重視度 $F(4, 206) = 39.02, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .43, MSe = .580$; 外向性重視度 $F(4, 206) = 28.39, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .36, MSe = .657$; 知的的好奇心重視度 $F(4, 206) = 54.13, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .51, MSe = .497$; 情緒安定性重視度 $F(4, 206) = 29.94, p = .000, \text{偏}\eta^2 = .37, MSe = .645$)。

第1クラスタ ($n=24$) は良識性の重視度が相対的に高いことから「良識性重視群」と命名した。第2クラスタ ($n=31$) は情緒安定性が相対的に高いことから「情緒安定性重視群」と命名した。第3クラスタ ($n=40$) は知的的好奇心の重視度が相対的に高いことから「知的的好奇心重視群」と命名した。第4クラスタ ($n=83$) はその他のクラスタにくらべて重視度に顕著な特徴は見られないが、相対的に外向性の重視度が高いことから「外向性重視群」と命名した。第5クラスタ ($n=33$) は非攻撃性と協調性の重視度が相対的に高いことから「非攻撃・協調性重視群」と命名した。非攻撃性と協調性を重視している群が合併されたが、相対的にどの性格特性を重視しているかによって調査対象者が群分けされたと言えるだろう。

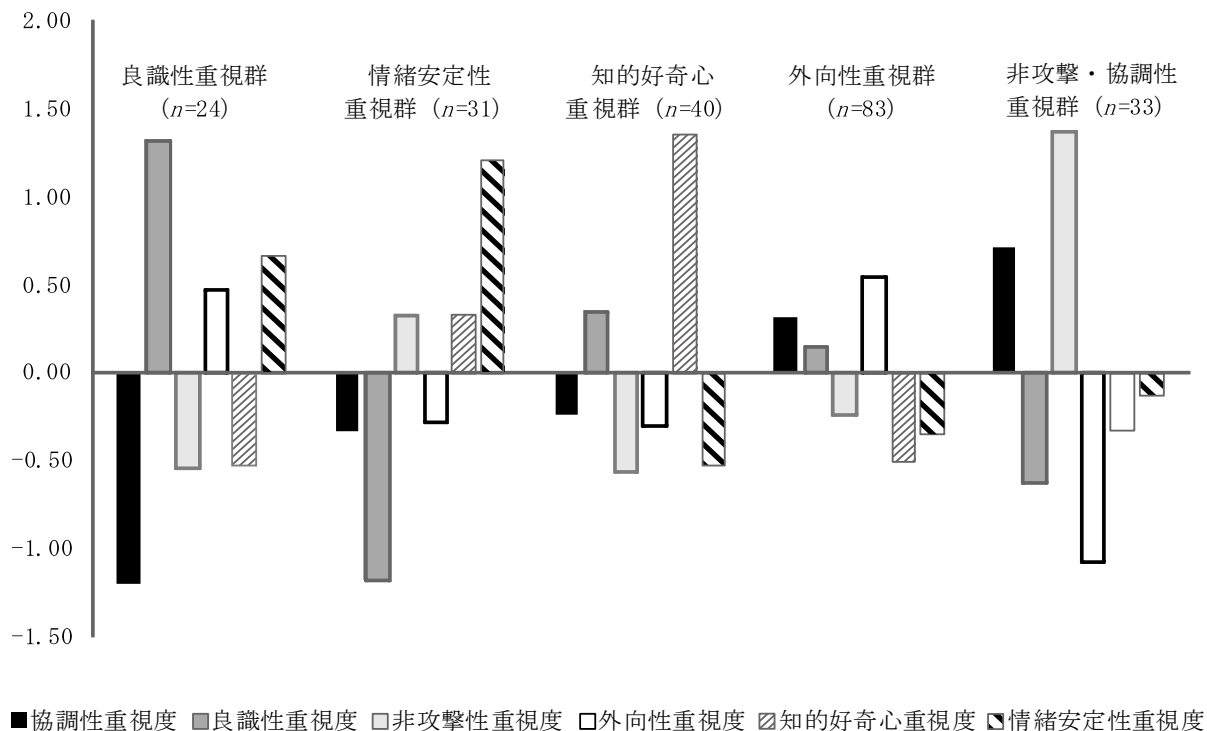


Figure 1 各クラスタにおける児童の性格特性の重視度の平均値 (標準化後)

Table 4 各クラスにおける調査対象者の性格特性の平均値と標準偏差

	良識性 重視群 (n=23)	情緒安定性 重視群 (n=29)	知的好奇心 重視群 (n=40)	外向性 重視群 (n=83)	非攻撃・協調 性重視群 (n=32)
協調性	13.30 (2.70)	13.45 (3.03)	13.28 (2.48)	13.96 (2.62)	14.38 (2.42)
良識性	13.78 (2.47)	11.83 (3.16)	12.55 (2.98)	13.57 (3.44)	12.03 (3.55)
非攻撃性	13.57 (3.70)	14.55 (4.10)	14.15 (3.68)	14.80 (3.52)	15.91 (2.94)
外向性	12.87 (3.96)	12.45 (3.42)	13.95 (3.12)	14.72 (4.17)	12.50 (3.08)
知的好奇心	12.52 (3.26)	12.38 (3.19)	12.08 (2.89)	11.57 (3.11)	11.25 (3.51)
情緒安定性	11.57 (4.15)	11.90 (4.72)	11.25 (4.25)	11.08 (3.95)	10.38 (3.35)

注) 括弧内は標準偏差；Figure 1と人数が異なるのは欠損値による。

次に、各群の調査対象者自身の性格特性の違いについて検討した。各群の自分自身の性格特性の平均値と標準偏差をTable 4に示す。

調査対象者の性格特性の違いについて、5つの群(クラス)を要因とする一元配置分散分析を行った。その結果、良識性($F(2, 202) = 2.79, p = .03, \text{偏}\eta^2 = .05$)と外向性($F(2, 202) = 3.58, p = .01, \text{偏}\eta^2 = .07$)で有意な効果が示された。良識性と外向性について、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「外向性重視群」は「情緒安定性重視群」にくらべて良識性が高い傾向にあった($MSe = .966, p < .10$)。また「外向性重視群」は「情緒安定性重視群」と「非攻撃・協調性重視群」にくらべて外向性が有意に高いことが示された($MSe = .952, \text{いずれも } p < .05$)。

考 察

本研究の目的は、教職を志望する大学生を対象にして、小学校児童にどのような性格特性をもつことを期待するのか、その相対的な重要度を明らかにするとともに、児童に重視する性格特性と大学生の性格特性との関連について検討することであった。

分析の結果、大学生は協調性や良識性を重視し、知的好奇心や情緒安定性は相対的に重視していないことが明らかとなった。思いやりがあること、人に対して優しくすること、誰にでも親切にすることといった協調性や、最後まで全力をつくすこと、やろうと思ったことを根気強くやることといった良識性は、教育現場においてクラス目標や学校の教育目標としてしばしば掲げられており、本研究の結果は、それを反映したものと考えられる。

他方、たくさん物事を知っていると知的好奇

奇心に関する項目や、あまり心配ばかりしないといった情緒安定性に関する項目の重視度は相対的に低かった。この結果については、本研究で用いた特性項目の表現や項目の偏りの影響も考えられるが、知的好奇心や情緒安定性は、協調性や良識性に比べられると重視されにくいことが示唆される。ただしこの点については、現職の教員の結果と比較するなどしてさらに検討する必要があるだろう。

児童に重視する性格特性と大学生の性格特性との関連については、外向性が高い大学生ほど児童の外向性を重視し、非攻撃性を重視しない傾向にあること、また知的好奇心が高い大学生ほど児童の協調性を重視しない傾向にあることが示された。しかしそれらの相関は低く、強い関連は見い出せなかった。

このような結果は、性格特性の相対的な重視度に基づいて調査対象者を群分けし、その群間で性格特性を比較した場合も同様であった。具体的には、外向性を重視する人は外向性が高い傾向にあること以外、明確な違いは見い出せなかった。これらの結果を踏まえると、外向性の高い人は外向性を相対的に重視する傾向はあるが、どのような性格特性を重視するかは、調査対象者の性格特性以外の要因による影響が強いと考えられる。

いずれにせよ、性格特性の相対的な重視度には個人差があり、それぞれの性格特性を重視しやすい人とそうでない人がある程度明確に分類できることは示された。今後は、このような性格特性の相対的な重視度の個人差が、どのような要因と関連するかについて、別の要因を加えてさらに検討する必要があるだろう。

今後の課題としては、以下の2点が挙げられる。第一は、性格特性の重視度の個人差が、どのような指導行動の違いを生じさせ、その結果、児童の行動や適応

感にどのような影響を及ぼすかについて、現職教員や児童を対象にして詳細に検討することである。

第二に、児童に期待する性格特性の違いを相互に比較し合い議論することが、どのような教育効果をもつのかについて検証することである。授業では、自身の結果と周囲の他者との結果を比較させ、その違いについて議論させた。授業後の感想には「自分の重視する性格特性と友人が重視する性格特性が大きう違うことに驚いた」、「自分の児童に対する見方に偏りがあることに気づけた」などが記述されており、自分自身の児童に対する見方を振り返り、児童の多面的な理解の重要性に気づかせる効果を持つことが示唆された。今後は、このような授業実践の効果についても検討する必要があるだろう。

引用文献

- 天根 哲治・吉田 寿夫 (1983). 児童のパーソナリティに対する教師の認知次元と次元ウェイト 兵庫教育大学研究紀要 (第1分冊), 4, 141-150.
- Brophy, J. E., & Good, T. L. (1974). *Teacher-Student Relationships: Causes and consequences*. Holt, Rinehart and Winston. (プロフイ, J. E.・グッド, T. L. 浜名 外喜男・蘭 千壽・天根 哲治 (共訳) (1985). 教師と生徒の人間関係: 新しい教師指導の原点 北大路書房)
- 浜名 外喜男・蘭 千壽・古城 和敬 (1988). 教師が変われば子どもも変わる 北大路書房
- 飯田 都 (2002). 教師の要請が児童の学級適応感に与える影響—児童個々の認知様式に着目して— 教育心理学研究, 50, 367-376.
- 古城 和敬・天根 哲治・相川 充 (1982). 教師期待が学業成績の原因帰属に及ぼす影響 教育心理学研究, 30, 91-99.
- 近藤 邦夫 (1984). 児童・生徒に対する教師の見方を捉える試み—その1 方法について— 千葉大学教育工学研究, 5, 3-27.
- 近藤 邦夫 (1994). 教師と子どもの関係づくり—学校の臨床心理学—東京大学出版会
- 近藤 邦夫・沢崎 俊之・齊藤 憲司・高田 治 (1988). 教師—児童関係と児童の適応—教師の儀式化の観点から—東京大学教育学部紀要, 28, 103-142.
- 村上 宣寛・畑山 奈津子 (2010). 小学生用主要5因子性格検査の作成 行動計量学, 37, 93-104.

謝辞

本研究の趣旨を理解し調査結果を提出してくれた学生諸氏に感謝いたします。

(2017年9月25日受理)